書評

井上宗雄著「中世歌壇史の研究 室町前期」

岡本彦一

わたくしは、本書の出版されたことを聞いて、ぜひ一ぺん目を通したいものだと思つた。そこには多くの教えられることがあるにちがいないと思ったからであつた。そして、手にとつて見て、びつくりした。これはとても読めた本ではないし、また、読まねばならぬ本だと。つまり通読して論のはこびに教えられたり、感心したりするていの本ではない。通読するにはたいへんな忍耐がいるし、さてそのままでは何も得る所のない読書になってしまうであろう。だが、中世の和歌を研究する者だけではなく、ひろく中世の文芸を研究する者は、この著述に目を通さないわけにはいかぬだろう。「中世文学を研究しようとするものには、必ずいつかは誰かが一度はしなければならない課題であり、基礎的な作業なのである」と伊地知氏はその序で述べている。本書はそういう作業の成果なのだから。

本書の性格は前記の如くであるから、わたくしには本書を評論する資格はない。ただ習うことがあるばかりだ。そこでまず一応の内容紹介を試みておきたい。

「序章において鎌倉時代、南北朝時代の歌壇史を素描」する。これはまず導入だ。ここにすでに著者の文献実証主義が濃厚にあらわれている。ついで、「第一章から第八章までは、明徳末から長享、延徳に至るほぼ一世紀の歌壇を、八期に分けて叙述する」。その態度は「資料に即して述べる事を原則とし、典拠はいちいち記すようにつとめた」とある。

第一章は応永初期の歌壇。宮廷、公家の歌壇、伏見殿歌会、今川了俊と冷泉家が扱われる。なお、伏見殿歌会は以下第五章に至るまで扱われている。

第二章は応永中期の歌壇。冷泉為尹と今川了俊が中心であり、それに後小松院歌壇、公家歌人が扱われる。

第三章は応永末期の歌壇。宮廷・公家の歌壇・宋雅・雅世父子も扱われるが、地下歌人の進出、耕雲明魏、正徹、今川範政が特に取りあげられる。隠者についての論もある。なお、正徹は以下第五章に至るまで扱われる。

第四章は永享期歌壇。公武歌壇、新続古今集の撰集、撰進、冷泉家の衰退。新続古今がめだつ。

第五章は文安・宝徳期の歌壇。宮廷・公家の歌壇、武家歌壇。一条兼良が大きい存在。

第六章は寛正期の歌壇。宮廷・武家歌壇のほか、勅撰和歌集の企画、隠者歌人、それに地方歌人の動向が扱われる。東常縁、木戸孝範の名が現われる。勅撰和歌集は飛鳥井雅親の撰で中絶。

第七章は文明前期の歌壇。京洛歌壇と地方歌壇、隠者歌人とに大別。京洛では一条兼良、地方では斎藤妙椿、蒲生智閑、大内政弘、太田道灌、隠者では正広、心敬の名が見える。それに東常縁と宗祇が特記される。

第八章は文明後期の歌壇。宮廷歌会。歌道

師範家、公家歌人。足利義尚、義政を中心として幕府歌壇、武家歌人。地方歌壇、隠者歌人。この三つに大別されよう。義尚と宗祇とは大きく扱われている。

以上が本文のポイントである。なるほど、こういうふうに書いてきただけでも歌壇の流れは、ほの見える。宮廷から武家へ、隠者・地方歌壇へのひろがり工合がである。

伊地知氏は序で「本書のうち、とくに著しいと思はれることは、室町前期の禁裏、幕府等の公武間に行はれた月次、点取、著到、続歌御会等における尨大な和歌群の整理であり」云々といつている。まことにそのとおりで、前人未踏の地へ踏みこんでの業績であろう。また氏はついで「また慕景集異本の調査。または、「為家卿和歌書」「一禅御説」「歌林」等の発掘であり」とする。なるほど発掘であり、本書の性格としては、それにふさわしく取りあげられてはいるのだが、叙述としてはいまひといきの食いたりなさがある。また氏はついで「一方には義尚歌壇の東山文化形成への史的意義や兼良歌学の系統、正徹の新続古今撰集当時の立場、東常縁の歌壇的評価の解明など、鮮烈なものがある」とする。伊地知氏の言のとおりなのだが、わたくしには、特に、義尚歌壇と東常縁の項がすぐれていると思われた。すなわち、著者の克明な文献実証主義の最も成功した例がここに見出されるからである。義尚歌壇における公武一体化の意義、大規模な、絢爛たる、しかも極度に遊戯化した歌壇的催しの意義が実証的に示される。東常縁、一地方歌人の常縁を宗祇がいかに権威づけ、それによつていかに宗祇自身を権威づけたか、この相互関係があざやかに実証されている。

付録には「堯孝、東常縁年譜」、「室町前期私家集伝本書目」、「各家、各派系図」の三つが収められている。このなかでは年譜が注目すべき仕事であろう。年譜に堯孝・常縁をとりあげた事については、著者によれば、了俊・耕雲・正徹・兼良・実隆ら重要歌人にはすでに年譜があり、公卿は比較的事蹟がわかりやすいのに対し、この両者はわかりにくい、またその上に、堯孝は歌壇の中枢部におり、常縁は傍流であつたのに、後世評価乃至名声が逆になつているおもしろさがあり、さらにこの両者の生涯をあわせると、ほぼ室町前期にわたり、本書に取り扱つた時期と一致する、したがつて、この両者の事蹟に、一般歌壇事項を加えることによつて、本書の年表をも兼ねさせようとする意途をもつている、というわけである。頓阿流および東家の人の事蹟には典拠を付した詳密なもので、8ポ2段組31ページにわたつている。

伝本書目は「応永に入つてから物故した人、その後ほぼ長享・延徳頃まで活躍した歌人の私家集伝本」で、「殆どが公開図書館のものであるが、それは個人所蔵のものに調査が全く及ばなかつたからである」と著者はいうが、これまた8ポ2段組21ページにわたるものである。

以上、本書の大要をのべたが、著者の作業は、伊地知氏の序によれば「全国的に博捜された資料を相互に比較考証し、調査整理して、それを史的展開のうへに浮彫されたもので、貪欲な博捜と入念な調査努力とには、文句なしに頭のさがる思いがする。若いうちでなければ、できない作業である」とあつて、いみじくもいいあてたものだという感が深い言である。かつて、書誌学の碩学福井久蔵の著者に「そこで不肖はどうかして他に類本を広く求めて見たいと思つていた。併し足弱の老人

採訪に出掛けることも今は不可能である」という一文を読んで感じたことの、その反対を本書から痛切に感じるのである。

著者によれば、歌壇というのは「幾人かの歌人がグループを作つて、他のグループと何らかの交渉を持てば、そこに歌壇というようなものが生れる」というのであり、「こういうグループとか派とかいうような仲間意識による歌人集団の存在、行動を調べる事は、特に中世和歌史では、重要な事であろうと思う、というのが研究意途であるようだ。そして特に中世後期に焦点をあわせた理由は、鎌倉期和歌史の研究は本格化し、深化しているのに、この期は考究の機運乏しく、その反面、この期は文化が地域的にも、階層的にも普及拡大の一途を辿つた重要な時代であるからだ、と著者はいうのである。この認識の上にたつた、この研究意途は、「歌人集団の存在・行動を調べる」という点においては十分になしとげられているのではないか。「貪欲な博捜」がそれをなさしめたのである。

だが、われわれは、今後の著者にこの達成以上のものを求めてはいけないのであろうか。「行動」からさらに溯つて「仲間意識」の解明である。常縁・宗祇の線などでは、ここに突入して、成果をあげているわけだから、慎重にこの世界に分け入つてもらいたいというのは無理な注文ではないと思われるのだが。

さて、次に、伊地知氏が序で出している問題、「ある人はいう、井上氏の論述はいつも文学以前で終つていると」、「文学というものを、われわれははたして純粋にそして客観的に抽出し、それを厳正に批判し論評することができるものだろうか」、「評論しえたと思う文学論は、あくまでもその評論家をとほして、その人なりに抽出した文学論であり、その人個人の人間的な投影にすぎない」という問題である。

わたくしは思う。井上氏の本書における論述は、ある人のことばを借りれば、文学以前で終つていると。しかし、そのことは、本書の価値にいささかの関係もないことである。井上氏は文芸だけを研究しなければならぬわけでなし、また氏自身、研究の意途を「歌人集団の存在・行動」と限定していられる。それ以上の事を求め、そこにないからとつて文句をつけるというのは子供のないものねだりとえらぶところがない。これだけ精密な文献主義的調査研究はそうあり得るものではない。わたくしはありがたく、うれしく、その学恩を蒙りたい。文芸研究は伊地知氏も論ずるごとく「かうした人の気をひかない地道な基礎調査がなければ、できない相談なのだ」から。

文芸を文芸として研究する場合、主体的享受が先行することは避けられないことである。この主体的享受は時によつて「その人個人の人間的な投影」を、その論のなかに満ち広げ終るかも知れない。投影のみになり終つて、客観的妥当性を伴わない場合、それは学問ではなかろう。単なる評論にすぎない。いや、その評論さえもが、一面において強い個性を要求されるその反面、強い説得力を持たねばならぬ。この説得力は単に教祖的発想によつて達せられるものではあるまい。だが、評論はあくまで、いま当面する問題の解きほぐし乃至は新しい方向の指示という任務を持つ。文芸の学的研究は、その成果が時務処理に利用されることを拒むものではないが、本来それは別のことであつて、文芸の本質解明につながるものでなければならぬ。

作家の人間研究、その家系、その行動、その性情、その思想の研究は文芸研究でないとする意見がある。文芸はかならず言語を媒材として成立するものであるから、言語をもつて成立している作品研究こそが文芸研究なのであつて、つまり作品の言語面よりの追求によつて文芸研究が成立するのであつて、人間としての作家をいくら追求してみても、それはついに文芸研究ではない。作家は芸術活動を営むであろうが、その活動は言語化された作品としてのみ提示されるのであり、作品のみが唯一の芸術活動の証左であるのだから、という見解である。

いまはこの見解について論ずることはやめたいが、文芸研究は、文芸作品のみの、その言語面よりしてのみの研究によつて到達し得られるものであろうか。作品研究が文芸研究に於て占める位置は最も重要なものであることは論をまたぬが、文芸はそれだけで解明しつくせるものではあるまい。当初に主体的享受という難関があつて、客観的厳正さと真正面から対立している。客観的厳正さを守るためにも、また文芸そのものの解明のためにもあらゆる途がえらばれてよいのではないか。作品をとりまくもろもろの現象、作家も作家グループはもちろん、およそ作品と関係のあるあらゆるものが研究対象となり、それが文芸研究という炬火に照し出される範囲において、組織づけられてゆく。こうして幾条かの炬火の列は未知の闇黒をつきぬけて文芸の殿堂にせまり、あくまでせまりにせまるのである。文芸は永遠に解明されるものでもなく、また研究の方法論も最終的確立を見る筈のものでもなかろう。むしろ、手さぐりの研究志向とその実践のうちに学がおのずからに確立されてゆくのではないか。過程こそが学そのものなのだろう。

文芸作品が本当の意味で文芸作品であり得るとき、それが古筆であるのではなく、出版社側から見た単なる商品でもないとき、つまり文芸的機能を発揮するときは主体的享受の行われるときである。こうした意味で享受者側を度外視した研究はそれだけの弱点をもつ。

和歌のように、制作活動と享受活動とがいろんな意味で一体化している文芸様式にあつては、歌壇の研究は、和歌文芸の研究にするどくせまるものといつていい。ただ、井上氏の本書は、さきにもいつたように、始めから著者は和歌文芸の本質にせまろうとはしておられないのだ。せまるべき土台を据えられたのである。研究はここを出発点として、はなはだ実のり多い行く手が展望せられるのだ。本書の出現を機会にもう一度、文芸の学における方法論を省察してみたいものだ。

わたくしは、ながながと蕪辞を陳ねてきたようだ。この一文をとじめるに当つて思うことは、本書のように、文献的実証的記述的な論述の当否をいちいち検証する能力を持ちあわせていないことだ。こうしたわたくしが、この重厚な力作を、ごく浅く上つらだけを読んで、一方的な見解と言辞を弄したのであるから、さぞ、著者や序文の筆者伊地知氏に礼を失することがあつたかも知れぬ。わたくし浅学の故とおゆるしをお願いしたい。

（昭和三十六年十二月、風間書房発行。A5判、四五〇ページ、写真四ページ、序二ページ。定価一五〇〇円）